

リスクマネジメント・コース開設記念シンポジウム

開催日時 2009年1月14日 14時～17時

開催場所 九州国際大学KIUホール

開催挨拶 九州国際大学学長 後藤勝喜教授

参加者 作家（北九州市立文学館館長） 佐木隆三氏

元国土交通省都市地域整備局長（森ビル株式会社特別顧問）

柴田高博氏

元九州管区警察学校教授兼教務部長（富国生命参与） 三浦尚司氏

元北九州市消防局長（北九州選挙管理委員） 渡辺崇浩氏

九州国際大学法学部教授 湯浅壱道教授

九州国際大学法学部教授 古屋邦彦教授

パネルディスカッション司会 九州国際大学法学部教授 山本啓一教授

総合司会 九州国際大学法人総務室次長 神力潔司氏

神力氏：本日の総合司会を担当させていただきます学校法人九州国際大学の神力と申します。どうぞ長時間ですけれどもよろしくお願いします。昨今世界経済というのは非常に混沌としている状況の中ですが、新たな年を迎えまして、皆様方にとりましても発展の年ということを祈念したいと願っております。またこの様な時期にこういったシンポジウム、記念講演会というものを開催させていただきますことを、高い所ではではございますが御礼を申し上げたいと思います。

また、この様な悪天候の折に、非常に沢山の皆様方にご参加を頂きましたことを大学関係者一同心より御礼申し上げたいというふうに思います。ありがとうございます。さらに、本日の記念講演、シンポジウムは北九州市の助成に基づいて開催させていただいているということをお知らせしたいと思います。

本日の記念シンポジウムは、九州国際大学法学部が来年4月より、リスクマ

ネジメント・コースという新たなコースを開設させていただくことを記念して、開催させていただきました。私どもは、非常にホットなテーマだと理解しております。危機管理、リスクマネジメントという分野に関して、少しでも今日ご参加の皆様のお役立てができればと願っております。また本学といたしましても、地域の皆様方に支えられて教育機関として今後も益々発展を遂げてまいりたいと思っておりますので、どうぞ、今後とも末永いお付き合いをよろしくお願いしたいというふうに思っております。

さっそくですが、本日のシンポジウムのご確認をさせていただきたいと思います。私の概要説明の後、学長の後藤教授より開会のご挨拶いただきます。その後14時15分から、佐木隆三様、柴田高博様から基調講演をそれぞれいただきます。15時20分に、両氏に加えて、警察官ご出身の三浦様、消防署出身の渡辺様、本学の教授の湯浅先生、古屋先生を壇上にお迎えして、パネルディスカッションを予定しております。ディスカッション終了後には皆様の質疑をお受けする時間も若干ご準備を差し上げたいと考えております。それでは早速ですが、本学学長後藤教授に開会のご挨拶をお願いしたいと思います。後藤学長よろしくお願いいたします。

後藤学長：皆さんこんにちは。ただいまご紹介いただきました学長の後藤でございます。どうぞよろしくお願いいたします。本日はご多忙にもかかわらず、行政、あるいは企業から、沢山の方においでいただきまして誠にありがとうございます。この学校を代表しまして心から御礼申し上げたいと思っております。ただ今ご紹介ありましたように、本学がリスクマネジメント・コースというものを立ち上げましたのは、本学の80年に及ぶ伝統を活かしつつ、新たに問題解決能力という時代のニーズに適応した学生を消防、警察あるいは企業の分野で送り込みたいという強い意欲から、このような構想を打ち立てたわけでございます。私たちはこのコースを益々発展させていきまして、一つは大学院教育と連動させるという事を考えております。もう一つは学部間の垣根を越えたところ

にコースを広げまして、益々充実した内容にしていきたいというように思っております。どうか地域の企業、あるいは行政を支えている皆様方のお力をちょうだい致しまして、ますます本学のこのコースを発展させていきたいというように思っておりますので、どうかよろしくお願いしたいと思っております。本日は有り難うございました。(拍手)

神力氏：それでは基調講演に移らせていただきたいと思います。まず、最初の講師のご紹介をさせていただきます。佐木隆三様。皆様よくご存じだと思いますけれども、簡単に佐木様の略歴をご紹介させていただきたいと思います。皆様ご存じ、作家でいらっしゃいます。現在は北九州市立文学館の館長でございます。福岡県立八幡中央高等学校をご卒業後、八幡製鉄所にご勤務をなされ、1976年『復讐するは我にあり』で第74回直木賞を受賞され、『死刑囚 永山則夫』など著書多数お持ちです。本日は、犯罪等々に関するリスクマネジメントということでご講演を賜りたいというふうに思っております。基調講演の題名は「リスクマネジメント・コースの役割」となっております。それでは佐木先生どうぞよろしくお願い致します。

佐木氏：ご紹介頂きました佐木隆三です。今日、聴いて頂きたいと思って準備したのはオウム真理教事件であります。オウム裁判は1995年9月から東京地裁で集中して審理されました。これは組織犯罪でありますから189人が起訴され、現在判決が確定されていない被告人が8人おりまして、いずれも東京高裁で死刑判決を受けて最高裁に上告中であります。確定している死刑囚は教祖であった麻原彰晃こと松本智津夫を含め5人おります。

オウム真理教は、1995年3月20日に地下鉄の3つの路線で5本の列車内で地下鉄サリン事件を起こすわけなのです。ご存じかと思いますがサリンというのはナチスドイツが開発した化学兵器で極めて殺傷能力の高いものとされており、この地下鉄サリン事件は、まもなくオウムの犯行とわかり、関係者

が次々に逮捕されるだけでなく、その前年94年6月の松本サリン事件もオウムの犯行である事が発覚し、遡って1989年11月の坂本弁護士一家殺害事件もオウムの犯行と判明しました。坂本弁護士一家殺害事件、松本サリン事件、地下鉄サリン事件をオウムの三大事件と言います。

なぜオウム真理教が1995年3月20日の地下鉄サリン事件を起こしたのかというと、その1ヶ月程前に公証役場事務長拉致事件というものが起きております。公証人は裁判官出身者になる事が多いのですが、その未亡人がオウムの信者になっておりまして、公証人というのは不動産の大きな取引があれば、それに立ち会うのですね。とにかく裁判官出身の公証人の5億円と評価されている遺産を相続した奥さんが、すでに出家する約束で6000万円のお布施をしておりました。出家というのはご承知のように俗世を捨てて、オウムの場合でしたら仏に仕える身ということでお布施をして裸一貫で出家するという建前でありますから、オウムとしては5億円を当てにしていたのですが、どうも金、金、金と金ばかり要求されますので、未亡人は嫌気がさして「私やっぱり辞める」と言うと、公証役場事務長のお兄さんが「何処かへ行行って身を潜めていなさい」ということで、オウムのほうは、あれこれいっても結果的に埒が開かないので、午後4時過ぎでありますけど品川区上大崎の路上でワゴン車を使って拉致していくのです。それで行方不明になってしまう。ワゴン車はレンタカーでありまして、借りた男の指紋が書類から発見されて、山梨県の上九一色村にあった教団本部にいつ強制捜査が入るかもしれない、そういうオウムにとっては危機的な状況になって、それでは首都圏に大混乱を起こそうじゃないかということになりました。官庁は霞ヶ関に集中しておりますから、霞ヶ関を通る3つの路線に5人の出家信者が乗り込んで、サリンを発散させて、死者12人、5000人前後の重軽症者を出すという大惨事になったわけであります。

今日は地下鉄でサリンを発散させた2人の被告人、2人の男の話を聞いて頂きたいと思います。1人は広瀬健一という男であります。広瀬健一は1964年6月生まれです。地下鉄に乗り込んでサリンを発散させて死者二人を出している

のですけれども、彼は早稲田大学の理工学部応用物理学科を卒業しております。それから大学院にはいって、物理及び応用物理学を専攻したのですけれど、修士課程の2年間で辞めて突如としてオウム真理教に出家して、サリン事件の実行犯になるのですね。彼の裁判に早稲田大学時代の先生が証人として出廷なさいまして、色々な話をなさったのですが、大変私にとって印象的でありました。早稲田を首席で卒業すると銀時計が出るそうでありまして広瀬健一は銀時計組であります。応用物理学科の学生は100人だったそうではありますが、この教授が大学で長く教えた経験からすると、広瀬健一は本当に大変な秀才だったそうであります。この先生が86年4月から89年3月まで指導教授を務めておられるのですね。という事は学部の4年生、それから大学院の修士課程の2年間、合わせて3年間、広瀬を指導なさっていたわけです。広瀬の修士課程の論文は「高温超伝導の二次元」というテーマだったそうでありまして、超伝導というリニアモーターカーを思い浮かべられると思うのですね。今日の読売新聞の社説に「リニア新幹線夢の超特急をどう実現する」という社説が出ています。「東京、名古屋間を時速500キロわずか40分で結ぶ超高速鉄道が実現に向けて動き出したと。磁力で浮上し高速走行するリニアモーターカーによる中央新幹線である。JR東海が最終的には大阪までリニア新幹線を伸ばして、東京、大阪間を1時間で結ぶ計画である。三大経済圏、東京、名古屋、大阪を直結してこそ超高速鉄道の強みが生きる」というのがたまたま今朝の新聞に出ておりました。広辞苑の第六版の超伝導という項目を今朝方書き写したのですけれども「絶対零度近くの極低温である種の単体金属、多くの合金金属間化合物で電気抵抗が消失する現象。1911年カマリング・オネスが発見。その後超伝導状態では完全半磁性を示すことが判明。1986年から87年、液体窒素温度で超伝導を示す高温超伝導体がセラミックスで多数発見された」「カマリング・オネスというのはオランダの物理学者で、ヘリウムを液化して超伝導を発見し、低温物理の開拓者」これも広辞苑によります。ノーベル賞も受賞しております。

1986年から87年にセラミックスで超伝導現象が多数発見されたというので

す。今申し上げた、広瀬健一が1987年3月に書いた「高温超伝導の二次元」、高温というのは絶対零度というのが零下273℃だそうでありまして、液体窒素がマイナス196℃。だからマイナス273℃に比較すると高温であるという事です。マイナス196℃でありますから高温といっても0℃よりも上ではないのです。一応水銀で超伝導現象が得られたものをセラミックスで発見した。これは世界中でそこに着目していたわけですが、その先生によれば世界のトップサイエンスであると。その論文をもとにその先生と一緒に共同執筆した論文「高温超伝導の二次元」を87年6月に京都で開かれた国際会議に提出した。ところが全く新しい発見でありますから、評価するのに時間がかかって一年以上反応が無く、それで広瀬健一はがっかりしたというか、学会に対する不信感を持ったそうです。

ちょうどその頃、オウム真理教の麻原彰晃が「オウムは大学も創設して、理科系に力を入れたい。広瀬君のような人が是非出家して基礎を築いて欲しい」というふうに誘われたといひます。それで大学院を修士課程で辞めますというのを先生が一生懸命止めたけれども、きかない。「なぜ麻原ごときインチキを信じるのか」というと、「いえ私は、麻原が空中浮遊するのを見ました。この目で見ました」と。「理科を学問とするような人間が馬鹿な事を言うなと」いっても、「見ました」といってどうにもならなかったのです。

ところが彼が出家した後に「高温超伝導の二次元」が国際学会で評価されて、文字通り世界のトップサイエンスになったわけです。しかし、もう出家しているため、連絡がつかないという事で、どうしても無かったと証言台で先生は大変悔やんでおられました。先生曰く、「広瀬君の欠点は人を疑うことを知らない。だから麻原の様なインチキにころりと騙された」。この先生は法廷に出られた頃もうすでに70を越えておられて、旧制高校の出身です。旧制高校の頃は哲学も教えていた、文学も教えていた。しかし、「今頃の理科の学生は実験とか、研究で猛烈に忙しくて、哲学書とか文学書に親しむ時間的余裕もない。そこに問題があると思います」というふうに証言なさっていて、大変印象的で

ありました。

彼のお父さんはブルーカラーのお仕事をなさっていて、法廷で証言なさったのですけれども、二十歳過ぎて「おい、健一。今日一緒に呑もうよ」と言っても「いや僕、しなければならない事があるので」と言って勉強ばかりしていたというのです。本当に勉強ばかりしていた。だからテレビは見たかもしれませんが、映画も見に行ったことがどうやら無さそうなのです。そういう秀才が先生の証言にあるように、人を疑うことを知らないから、結果的にこうなってしまった。繰り返すようですが、超伝導の研究は世界のトップサイエンスなのです。そういう優れた頭脳主が、まだ最高裁で判決が出ておりませんが、5人の死刑が確定している事でもありますし、今まで通りの流れならば、広瀬もやがて死刑が確定して、いずれ死刑を執行されるわけです。そのことが非常に私自身残念でならない、その先生の証言を聴いてことさらその思いが高まっているようなわけです。

もう1人の地下鉄サリン事件の実行犯は、林郁夫という医者です。彼は慶應大学の医学部を卒業して、44歳の時に茨城県の国立病院の医局長をしていたのですが、突如として出家して、48歳の時に地下鉄サリン事件の実行犯になるわけです。オウムでは治療省大臣といって国家の省庁みたいなもののトップでしたけれども、元は心臓外科医でありまして、日本で5本の指に入る名医と言われておりました。石原裕次郎が大動脈瘤破裂で一回手術に成功するのですが、その時に林郁夫が執刀医だったのです。一度目の手術は成功するのですが、石原裕次郎という人は大酒飲みでありまして、節制が苦手なようで、その後亡くなるのですけれども、林郁夫が執刀した時は手術に成功するのです。こういう名医がオウムに出家してしまうのです。そして、こともあろうに人々の保健と生命を預かる身でありながら、サリンの様な猛毒を地下鉄で発散させて、大変な事件を犯してしまった、という事で自分には死刑しかない、どうか死刑にしてください、とよく法廷で泣いておりました。

この彼は、1995年5月上旬に監禁罪で逮捕されるのです。信徒がオウムに出

家して、でもやっぱり話が違うから元に戻りたいという時に、麻酔剤を注射して、コンテナを改造した閉じこめる部屋があるのですけれども、そこに信徒を閉じこめていたという監禁罪で逮捕されたのです。この彼が地下鉄でサリンを発散させた実行犯という事は、警視庁はまったく想定していないわけで、監禁罪、あと、薬事法違反とか色々罪名もあったのですけれども、その彼が一ヶ月も経たないうちに「私が、地下鉄でサリンをまきました」という告白をするのです。警視庁はびっくり仰天するわけなのですが、じゃ他の4人は誰かというところと正確に、「地下鉄の各駅に自動車で行ったのが誰と誰です。サリンを作ったのは誰と誰です」というような事を自白するわけです。

何故彼が自白したかという事なのですが、今回のリスクマネジメント・コースで警察官になろうと思われる方にとっても、おそらく興味のある話だと思います。オウム事件では、300人も400人も逮捕されました。最終的に起訴されるのが189人なのですが、応援が必要だから、暴力団担当であったある警部補も狩り出されて、あろう事が有名な心臓外科医の取り調べを担当する事になった。この方も東京地裁の法廷に出てこられたのですけれども「自分は工業高校を出て、警視庁に就職して宗教関係の事は何にもわからん。いわんや医学の事なんか分かるはずもない。だからどういうふうに取り調べるか」という事でした。その証人によると、暴力団を取り調べる時は、下手に甘い顔を見せるとつけ上がるから、いきなり恫喝をする。「おい、このちんぴら」とか、組長クラスであっても「反社会集団でろくでもない事をして大きな顔するな」というところからやっていくのだそうです。しかし、どう考えてもオウムの有名な心臓外科医に「おい、この林」といえなかったそうです。それで、取り調べは原則として二人で行いますから、主任取調官がその警部補、巡査部長が補助者という形でついて、「林先生」と言って第一声を切り出したそうなのです。「林先生、私は医学の事も宗教の事もわかりませんが、命じられて取り調べにあたる事になったのでよろしくお願いします」と言ったのだそうです。補助者である巡査部長はやりとりをメモすることになっておるようです。調書化する前に

その日の取り調べは補助者のメモがそのまま上に上がるのです、警視庁の刑事部長がそのメモを見て警部補が呼び出されて「何だ、これは。被疑者に対して林先生はないだろう」と大目玉を食らったそうです。だけど、どうしても「おい林」と言えないというのです。だからやっぱり、「初めに言ったように、俺は林先生で通すから、あんたメモする時は、『おい、林』でも『こら、林』でもいいからそういうふうにメモしろ」と巡査部長に言って、そういうメモが刑事部長に上がっていくわけです。非常に竹を割ったような性格と申しましょうか、身長180センチぐらいあるような大きな人でした。私から見ればこの人が暴力団の幹部じゃないかなというような、だいたいそういう人が暴力団担当する事が多いのですが、その彼がずっと林先生とって通したのです。客観的な証拠は揃っているわけで、無理に自白させる必要はないわけです。もちろん地下鉄サリン事件の実行犯だなんて全く思っていないのです。

それで、林郁夫はどうやら歴史が好きだということが分かって、歴史の本を読んでその話をしていたりしたそうなのです。これは林郁夫自身が言っているのですけれども、自分のような人の保健と生命を預かる立場の者がしてはならない事をしてしまった。そんな自分に対して敬意を払って先生と呼んで非常に紳士的な対応をしてくれた。もういたたまれなくなった、耐えられなくなった。もう隠し事は出来ない。青山吉伸という弁護士が、後に被告人になりますけれども、連日接見にやってきて、「尊師を守れ、麻原尊師を守れ」つまり、絶対に取り調べに応じるな、口をきくなという事をしつこく、しつこく言っていたけれども、結局、自分が地下鉄サリン事件の実行犯でしたという事を自白するわけです。結果として東京地検は林郁夫に対して無期懲役を求刑します。東京地裁判決も無期懲役で、彼は一番で確定して、現在服役中であります。なぜ検察側が死刑を求刑しなかったかという、彼が自白、これは自白というか法律的には自首というのだそうですが、普通犯人が手配されていて派出所に自首しましたなんて報道がありますけれども、法律的には官憲が知り得なかった事を自ら明らかにしたときに自首が成立して刑を軽減する事ができるという決まり

があります。彼が自白したために、麻原彰晃以下幹部達が一斉に逮捕、起訴されてオウム真理教事件の全容が解明されていくわけです。ですから、こうやって捜査に協力して難しい案件を解決する事ができたのだからということで無期懲役になったのです。

彼が最大の功労者という語弊があるかも知れませんが、取り調べにあたった警部補の真摯な態度、真剣な態度、あるいはジェントルマンとしての対応、これが林郁夫の心を開かせたというふうに思っています。オウム裁判に限らず色々な刑事裁判を傍聴して参りましたが、私にとって、この林郁夫の裁判というものは本当に印象的です。

林郁夫がなぜ出家したのかというと、彼は学生の頃から宗教が好きだったそうでありまして、医者になってから阿含宗に入るのです。桐山靖雄という人が管長でありますけれども、そこに十数年いて、ある日桐山さんと話をする機会があって、「管長、管長は解脱しておられますか」と聞いたら、「いや、まだその域に達しておりません。死ぬまでに解脱できたらいいなというふうに願っております」とこういうふうに桐山さんがおっしゃった。非常に謙虚な言葉だと思いますが、林被告はちょっと物足りないと思った。彼は国立病院の医局長で心臓外科医で患者さんも抱えておりましたから、オウムの信者が本を持ってきて「先生これ読んで下さい」ということがあったのだそうです。麻原彰晃の本を読んで、面白いなと思って、麻原彰晃の説法を聞きに通っているうちに、麻原と直接話す機会が巡ってきたので「尊師は解脱をなさっていますか」と聞いたら、「私は人類でただ1人の最終解脱者です」。まだ麻原は40になる前だったと思うのですが、それで、林郁夫は、凄い、あの桐山管長でさえも解脱していないのに、この人は解脱して。人類でただ1人の最終解脱者であると。林郁夫という人も、先ほどの広瀬健一じゃありませんけど、人を疑うことを知らない人です。医者の家に生まれて、慶應に行って、奥さんも慶應医学部の同窓で麻酔科医なのですが、奥さんと二人の子供を連れて出家するのです。麻原は凄いというふうに、人をいともたやすく信用してしまう、騙されてしまう。

それで裁判ですから、色々な人が被告人に質問します。「貴方ほどの名医がどうして、麻原のようなインチキに引っかかったのですか」というと、林郁夫が「私が名医とかそういう事を言われるけれども私はただの専門バカだったのです。専門バカです」と言って、泣き出すのです。この人はよく泣くのです。私から見れば非常に感動的な場面です。今日広瀬健一と林郁夫の話をしたのも、どんなに優れた医者であろうと、物理学者であろうと普通の社会常識がどこかで欠落している、そこに問題があるということを申し上げたいわけでありまして、リスクマネジメント・コースができる事で期待したいのは、色々な事をわきまえ、健全な社会常識をわきまえた上で専門家になってもらいたいと思っております。急いで色々な事を話しましたのでお聞き苦しかったと思いますが、ご静聴有り難うございます。(拍手)

神力氏：佐木先生ありがとうございます。私ども大学関係者として非常に身のつまされる思いと申しますか、知識や学力、技術だけを授けたとしても、やはり個人の意識と申しますか人格と申しますか、社会常識という所まで含めてきちんと伝えていっていかなければいけないという、そこに重大な問題があるというふうに教えられたと感じております。それでは引き続きまして、二つめのご講演「災害対策と危機管理」ということで、柴田高博様にご講演をお願いしたいと思います。柴田様は現在森ビル株式会社の特別顧問ということでご活躍なされております。東筑高等学校をご卒業後、慶應義塾大学の経済学部に進学され、同校ご卒業後、当時の建設省に就職をされ、皆さんよくご存じの兵庫県の都市住宅部長時代には阪神淡路大震災を経験なされ現場の指揮にあたられました。また内閣府の政策統括官防災担当を歴任されております。それでは柴田先生どうぞよろしくお願いします。

柴田氏：今日はリスクマネジメントについてのシンポジウムが開かれまして、大家の佐木先生の後にお話をさせていただく事を大変光栄に思っております。

今日は大学だから、大学生が大半かなと思っておりましたところ、大学生諸君らしいのはあまりおられなくて、一般市民の皆様の方が多様な感じがしております。話の内容は、大学生や若者に私自身色々考えているようなものを言おうと考えておりましたがために、ちょっと社会人の皆様には、お聞きづらいと思います。今さらというような事があるかもしれませんが、お許しをいただきたいと思います。

私は、昭和48年に建設省に入りました。今から三十数年前、社会資本整備が全然出来ていない状況で、田中角栄列島改造論というような時期に、社会資本を増やしていこう、下水道にしても高速道路にしても公園にしても、はるかに遅れているという状況でございました。私自身は社会資本整備計画だとか、政策だとか、あるいは予算ということをずっとやってきたわけでした、予算担当責任者、道路公団の民営化、内閣府の防災の責任者、そしてまた、国土交通省の街作りの責任者というような事で局長を三つ程やって、途中で退官をさせていただきました。リスクマネジメント、防災という意味では職務上経験したのは実は一年。内閣府の防災担当局長の一年しかございませんでした。その年は、たまたま台風が10個来ました。普通は2.5個、去年は幸いにも0個でした。その年は、中越地震、スマトラ地震、インド洋大津波それから玄海沖の地震など災害の当たり年でございました。そういう事も経験させていただいておりますし、もう一つ阪神淡路の大震災の時にはちょうど、兵庫県庁都市住宅部長というまちづくりと住宅担当の責任者でございました。ちょうどその時に地震が来まして、住宅復興、まちの復興という事で対応してきました。

私はリスクマネジメントとは、特別なことではないと思っております。日常生活そのものです。お父さん、お母さんに対する対応、友人、恋人。毎日色々な対応をします。対応が良ければ、上手くいくし、悪ければ仲違いをしてしまう。日々の生活、それから仕事の中でリスクに対してどう対処していくかということが重要であると思っております。毎日のレベル、年レベル、100年レベル、大きな災害色々な事が起きます。仕事は危機の連続です。小さな危機から

大きな危機から、仕事を上手くやっていくためには、やる仕事をしっかり事前に計画をして、作戦を練ってきっちりやっていく必要があると僕は思います。これが重要だと思います。まあこれはいいや、ここはしなくてもいいだろう、と言ってよく失敗します。私もよくそういう事で失敗することがよくありました。だけど、小さな事、小さな仕事で失敗する事はいいのです。また、勉強になるのです。しかし、いざという大きな時は失敗出来ません。長期的にしっかりした作戦を練るということと、もう一つは、直ちに対応しなくちゃならないということ。何かを言われた時に対応をきっちりできるか。両方私はあると思います。こういう事は社会人の皆様からしてみれば、何だ、当たり前だと思われるかも知れませんが、学生の皆様に聞いて貰いたいと思います。

さて、経験という事では阪神淡路について私はお話をせざるを得ないと思っております。今からちょうど14年前。もう14年になったのかなという感じがいたしますが、1月17日の5時46分大きな地震に私は現地で遭遇致しました。大都市、近代都市、しかも高齢化社会の中での大きな災害であったという事で、初めての大災害だったと思っております。6400人もの方が亡くなり、家屋40万以上が倒壊というか、被災を受けました。本当にそういうものに遭遇するとはまず人間は思いません。関東大震災の本は読んでいました。だけど、自分が未曾有の天変地異に遭うとは誰も思いません。皆さん方も思わないと思いますし、特に兵庫県関西の方では、「ここでは東京と違って地震がないからね」、だから安心なのだとかの根拠もなくみんな思っていました。リスク管理、危機管理というものが全く出来ていないというなかでした。

私はその時に自分で思い、職員の皆様に言っていたことは幾つかありました。一つは「被災者を安心させなければいかん」、二つは「知事を安心させなければいかん」。知事は最終責任者ですから。「ただし知事をミスリードしてはいけない」、難しい事を「はい出来ます」「すぐやります」と言ってミスリードしてはいけない。さらに、Xの法則というものをよく言っておりました。私は自分で勝手にXの法則と言っていたのですけれど、縦軸は人間の気持ち、0か

らなんとかし、助けてというのが縦軸。横軸は時間だと。被災者はまず助かった瞬間は命が助かって良かった。だけどだんだん、あれも欲しい、これも欲しいと欲が出てきます。全国のみなさんはなんとかして、助けてやれ、と地震が起きた瞬間は上だが、だんだん下がっていく。もう仕方がないことなのです。この交点から横軸へ行くとミスマッチになってしまう。いくらやっても無理。だからこの交点の手前まで一生懸命頑張ればいい。今だったらなにやっても全国の皆さんが応援してくれる、国の機関も徹底的に応援してくれる。地元の部長が言っているんだったらなんでもやってやる。そういうXの法則。交点よりも縦軸側で徹底的にやれと。ところが、その年の3月20日の日、サリン事件が起きました。もうあっという間に人々の関心はそっちへ行ってしまいました。私が思っていた交点よりもさらに交点が近くなった。

しかし、被災者をやっぱり安心させなきゃいかん、ということで、例えば仮設住宅を造らなきゃいかん。しかし、幾つ作って良いのか分からない。1万は最低行くだろうとか、要するにブラックボックス、情報のブラックボックスなのです。電話が通じない、何もわからない。ただぶっ壊れている、廃墟になっている。普段であれば、情報がいっぱい入ってきますよね、テレビでも新聞でもインターネットでも、チラシでも。山のように情報が入ってきます。うるさいぐらい入ってくる。もちろん、そこから良い情報を選ぶのもなかなか難しいですが、そのときは、逆に一切入ってこない、ヘッドクウォーターがブラックボックス。これは大変です。そういった中で、無茶苦茶やられているのは分かるけど、どこまでやられているのか分からない。

とりあえず被災者の所に仮設住宅を造りたいという事で、すぐ17日の地震から19日の日にプレハブ協会に来てもらって一万戸発注しましたら、プレハブ協会が「1万はうちは駄目だ、今まで最高は2年ほど前の雲仙普賢岳の1700の仮設住宅だ」と。それで3000はストックがある、3000は出せる。1万となると7000を工場全部ストップして造らなければならないから駄目だと言われました。しかし、それは責任を持って買うからということで、一万発注しまし

た。これは被災者に対する安心という事に関わって来るのですけれども、19日に発注しまして、何時だったかは忘れました、本当に24時間働いていましたから、「明日から工事にかかれ」という具合に私は言いました。課長なんか「明日は出来ません」と言うのです。それは出来るわけがありません。全国から仮設住宅を持ってこなければいけないのに、道路はガチャガチャ、船で持ってこなくちゃいけないなど、なんだかんだでもの凄く時間がかかるはずですよ。明日からは無理、どんなに早くても明後日21日からだと言われましたが、私はやはり「それは駄目だ」と。これだけ30万人の被災者が寒い中、今の時期ですから、寒い中にいて「仮設住宅、仮設住宅、仮設住宅」と、全国の放送も、全国民から「仮設住宅」と言われていました。だから、明日から工事に入ると。物が来るのは時間がかかるかしらん、明後日になるかしらんけれども、「場所をまず公園に獲って杭を打ちなさい」と。杭を打って着工に入るのであります。そこで「明日から仮設住宅の工事に入ります」ということで杭を打たせました。それがもちろん全国の放送に出まして、被災者を始めみんなが納得した。そういう事もリスクマネジメントの一つでした。

ほかに色々な事がありました。建設は本当は県の責任なんですけれども、入居は到底県では対応出来ないので市町村にお願いしました。2週間後ぐらいから仮設住宅が出来はじめて、誰を入れるかという事になって、ある市が「平等に入居の希望、募集要項をとる」と記者発表されました。記者発表も全て終わっていると言われましたが、私は「それは駄目だ。まだ募集要項は発送していないのだから、やはり、お年寄りだとかハンディキャップのある人、それから妊婦さんそういう人達から入れるべきだ」と。結局修正しました。それはもの凄く時間がかかりました。発表しちゃったし、申請書ももの凄い量刷ったし、それを私はひっくり返すということでひっくり返してしまった。タイタニックでもなんでも沈みかけている船からはやっぱり、一番お年寄りだとか、女性から行くべきであって、大変トラブルになりましたけれども、結果それで私は良かったと思っています。ただ、覚悟はしているのです。結局、高齢者の皆様

だけの仮設住宅になると。後で維持管理が大変だと。そこで維持管理は県も一緒にになってやっていくにしました。

その他いくつかありますけど、そういう経験をふまえて内閣府の時代に防災担当している時に、中越地震が起きました。その年は、台風が10個来たのです。信濃川の堤防が決壊して100人近い人が亡くなりました。行方不明も出ました。バスが流されそうになりました。20人ぐらい観光客の皆様なのですが、なんとか助かりました。そういった中で本当に必死になってやっていたのです。10月20日でしたか、非常災害対策本部を置いて、金曜日、土曜日に対策をみんながやって帰ってきた時に、私はみんなを待ちかまえて「水害も大変だけど、地震はもっと大変だから、まあご苦労さん」といいました。台風のせいで毎週毎週そんな感じだったのですが、そしたら、次の23日の土曜日夕方6時頃中越地震が起きました。

我々責任者は官邸の地下に入ると、そこにコントロールセンターがあって、関係省庁、局長みんなが集まります。それで情報収集をするのです。阪神淡路の時はそれが上手く行かなかったために、私が内閣府に防災を強化するために呼ばれたのです。そもそも情報がみんな違います。警察の情報と気象庁の情報と消防庁の情報とみんな情報が違う。阪神淡路の時はそれがバラバラに官邸に来てしまったという事もあったのでしょうか。

それらをまとめて整理をする。それから先遣隊を出そうという事で、車で出すという事になっていたのですが、私は「車なんかで間に合うわけじゃないか、それは駄目だ」という事で、隣の防衛省の局長に、「飛行機を出してくれ」、「出します」。ヘリを木更津から出してもらって、そのヘリで政府の職員20人を乗せて先遣隊が出発していくというような事から始まる。それから毎日毎日色々な対策を練っていく。非常災害対策本部では、毎日各省、局長に集まってもらって、仮設住宅、飲み物、食べ物ということで各分野にわけてやっていきました。しかし、土曜も日曜もやってきたがために職員がバテてしまった。よくわかるのです。被災者対策もやらなきゃいかん、そのうえ国会も開い

ていたのです。臨時国会です。国会の委員会からも呼ばれる、その答弁書を作ったりする中で職員が死にそうになっていましたけれども、水害の時から土曜も日曜もやらしているわけです。しかし、その時に本当に私は彼らにきつい事を言ったのです。土曜も日曜もずっとやって彼らはほとんど徹夜でやって、私自身も徹夜に近いのが続いたのですが、「局長、今度の土日は職員休ませていいでしょうか」。よくわかるのです。職員がもう死にそうなので。だけど私は「ここで手を緩めたら大変な事になる。ここは我慢してくれ、被災地には土曜も日曜もないのだから、我慢してくれ」ということで、少し大きな声で言いました。けれども、私がそこを辞めて内閣府から国交省の局長で戻るときに、彼ら若い連中が私に送別会をしてくれました。「局長、本当に良かった、局長が一生懸命言ってくれたから、マスコミの皆さんからも評価され、被災者からも評価される。与党からも野党からも皆さんから評価され仕事をやり遂げることが出来ました。有り難うございます。」と私は言われました。その時に、私はここに持っているのですけれど、彼らがくれたネクタイピンがあります。いつも私は宝物のように肌身離さず着けておこうと思っております。

私は若い皆様には、失敗は成功の元、恐れることはない、だけど大きな事で失敗するのではなく、小さな事で失敗してもいいと言いたい。頑張っていたきたいと思います。昨日テレビの12chに、松下幸之助先生が出ていまして、「私は失敗したことがない、成功するまでやるのだ、やり抜くのだ」と言っていて、こういう人もいるのか、あんまり失敗は成功の元と軽々しく言ってはいかんのかなと思いますけど。

それから、被災者だとか被災地だとか友人や家族、社会のために何が出来るとかという事を考えて頂きたい。私は若者に対して非常に期待しているのです。若者が大事だと思っているのです。阪神淡路の時も何万人もボランティアに来てくれました。最初は「こんな若い人が来ても足手まといだ」という意見もありましたけれど、私は是非やっていただきたいと思います。彼らも本当に助けようと思って来られた方もいらっしゃるでしょうし、たぶんちょっと見

てみようと思って来られた方もいるのではないかと思います。それでもあの惨状を見て若者達が一生懸命ボランティア活動やってくれました。最近の若い者はいつも言います。だけど、あの光景を見ると、私は日本の若者は健全だな、日本は大丈夫だなという感じを持ちました。我々と若者の生活環境が違う、文化が違う、我々は昔が懐かしいということで、常に「最近の若者は」というふうになるのだと思います。しかし、少子高齢化の社会において若者のみなさんが少なくなっております。私はやっぱり若者は大事にしくちゃいかんと思っております。ニートだとか、ネットカフェ難民だとか、若者達がそういうことになってしまっていることを非常に残念に思っております。社会としても、やっぱり若者達の活躍の場を広げてあげれば、彼らはどんどんやってくれる。もし若者が本当に変な感じになってしまうのであれば、我が国社会は溶けていってしまうのです。

10月、11月にインドやベトナムに行って参りましたけれども、若者達が本当に沢山居られました。非常に活力のある社会でした。日本の社会と比べてちょっと羨ましい感じもしましたけれども、若者の皆さんには頑張ってもらいたいです。自分の頭で常に考えるという事と、人の意見を聞かないのではなく、人の意見を広く聞いて懐を深くして。色々な事をやるというのは度胸がいります。度胸をもって頑張ってもらいたいです。有り難うございました。(拍手)

神力氏：柴田先生どうも有り難うございました。日常生活のリスクマネジメントという言葉について何かしら私が思い出したのは平生往生という言葉です。また多くの若者というものは宝物であるような教育、若者が宝物になるような教育をこのリスクマネジメント・コースでは実践していかないといけないのかな、というふうに感じた次第です。二人のご講演者に今一度大きな拍手をお送りしたいと思います。

それでは、プレゼンテーションとディスカッションという次のステージに移

らせて頂きたいと思います。まず始めに、プレゼンテーションにご参加の講師の皆さんをご紹介申し上げます。皆様方から向かって左手、柴田先生でございます。お隣が佐木先生でございます。そのお隣が本学の法学部の教授で古屋教授でございます。古屋教授は本学で企業法務のご担当をしております。そのお隣が同じく法学部教授で湯淺教授でございます。情報保護法等を担当しております。引き続きましてそのお隣が渡辺先生でございます。渡辺先生は戸畑高校をご卒業後、本学の法学部をご卒業になり、昭和38年北九州市の消防局に入所され、平成2年に消防司令長等々を歴任され、現職北九州市選挙管理委員という形でお勤めをされております。お隣が三浦先生でございます。昭和38年に中央大学法学部をご卒業の後、福岡県警察庁に入所され、現在富国生命で参与としてご活躍です。ここで一つお知らせなのですが、渡辺先生、三浦先生、佐木先生、柴田先生4名の方々は、今年4月から新たに開設させていただきましますリスクマネジメント・コースの客員教授に就任なさる予定でございます。それでは、ここで司会を法学部長の山本先生にお渡しします。

山本教授：ここからパネルディスカッションに移らせて頂きたいと思っております。法学部で始まるリスクマネジメント・コースでは、主に警察官を志望する学生に対して法律の専門知識だけでなく、様々な問題解決能力を身につけてもらおうということで準備を進めており、ここにいらっしゃる先生方、あともう一方いらっしゃるのですが、客員教授として4月以降教鞭をとっていただく予定です。もともと本学九州国際大学の法学部は警察官を沢山輩出しております。今現在も、警察官になりたいという学生が非常に沢山います。法学部だからということかもしれませんが、これは本学の伝統でして、例えば福岡県警には、200人ぐらいのOBが居るといわれております。法学部はここで伝統に立ち返って、立派な警察官、消防士、自治体職員の輩出を目指すために、こうした方々のご協力をいただいこうというふうに考えている次第です。ですので、今日はいわば壇上に客員教授、及び本学の先生が並んで、法学部のド

リームチームという形でお披露目しているわけなのです。まず、パネルディスカッションに先立ちまして、パネリストの方々に最初10分ずつプレゼンテーションをしていただこうと思っております。先生方それぞれ、各分野で様々なご経験をされておりますし、また専門的な知識も持っていらっしゃいます。そういったご経験を踏まえて、色々な危機やリスクの事例をご紹介いただき、またそれに対してどの様に考えるのか、またそのリスクをどの様にコントロールし、対処していけばいいのか、という事をお話いただければと思います。まず、最初に三浦先生からお願いします。よろしくお願いいたします。

三浦氏：ご紹介を受けましたので私から話させて頂きたいと思います。先ほど佐木先生と柴田先生の基調講演では、非常に次元の高いお話だったものですから、私は警察官の立場でのお話ということでさせて頂きたいと思います。1月の10日が110番の日ということは、皆さんもご存じの通りかと思いますが、110番通報はまさに現代がリスク社会であるということを間違いなく表現しております。福岡県警で平成19年度の110番件数は年間どれくらいかといいますと、58万件受けております。そのうち、警察官が現場に行ったのが45万件。実に54秒に1件ずつ110番通報されているというリスク社会なわけです。私はそういった中で、情報の伝達が遅れた結果、リスクが生じて危機管理に失敗した事例と、タイムリーに情報伝達が出来たことによって非常に上手くいった事例、それから警察官として皆さん方が一番現場で見かけるパトカーとか白バイとかそういったものに乗って勤務した場合における交通事故、こういった事によって失敗を起こした事例、この3つを手短にお話したいと思います。

まず一つは危機管理の意識を欠いた警察官のためにマスコミ対応が遅れた事例です。ちょうど今から10年ぐらい前に私は中央警察署の副所長をしておりました。平成7年の4月、新入学した1年生を迎えて初めての歓迎遠足が福岡市の植物園で行われたわけです。植物園は当時中央区の高台にありまして、丘や谷、自然を残した植物園だったわけですが、小学校6年生が1年生と一緒に引

き連れながら園内を遊んでいたところ、誠に運悪く、坂の上から岩石が転げ落ちてきて、小学校1年生の女の子の頭に当たって即死するといういたましい事故が起きました。私は副署長をしておりましたので、報道責任者として小学生が植物園で大きな事故にあったんだということをマスコミに報道したわけです。ところが、当時まだ携帯電話も十分に無い時でございまして、110番で現場にいった警察官からその後なんらの続報が無いわけです。事故の報告がないまま警察署に詰めかけた新聞記者とかテレビ関係の記者が「なぜ警察は続報を出さないのか」という事で「警察が何か隠しているのではないか」というような事ですごく私は問いつめられまして苦労した思い出があります。

現場の警察官は一生懸命仕事をやっているわけで、それはそれとして自分はまともにやっていると思っているわけです。しかし、現場の警察官には上司に報告するという意識が全く頭に無かったわけです。事実関係がしっかりやれば報告は帰ってからでもいいのではないかと現場の警察官は思ったわけです。ところが、速報性が要求されるマスコミ側からすれば、新入学の1年生が歓迎遠足という場で即死するという非常にショッキングな事故で、さらに福岡市の植物園には管理責任があったのではないかと高いニュース性があったわけです。私の対応がまずかったためにマスコミは子供を亡くされた家族に直接取材をするという取材合戦が激しくなりました、遺族にも大変、迷惑を掛けたという苦い経験がございまして。私は、報道関係者というのが時間との勝負で報道をやっているという事を知っておったわけですが、現場の警察官にはそういった危機管理の意識が無かったという事が今回の事件になっておるのです。私自身も反省したわけですが、この様な大きな事件の時には現場任せにせず、報告待ちの姿勢ではなくて、署員の中からしっかりした伝令あるいはそういった要員を即座に出すべきで、現場に急行させて遅まきながらも、報告を受けるべきだったかなと私は反省した次第でございまして。これが一つの私の苦い経験として残っております。

次は福岡空港でガルーダ航空機の離陸失敗の事故です。皆様方もご記憶に新

しいと思いますが、平成8年の6月13日午後0時8分に、福岡空港を離陸しようとしたガルーダ航空機DC10が機長の不適切な離陸判断によって滑走路を飛び出し、オーバーランして炎上しました。当時乗客、乗員合わせて275名のうち乗客3名が死亡しまして、乗員乗客18名が重傷、91名が軽傷を負い、また、救助にあたった消防士の方達52名が火傷するという大きな事故でした。この時私は県警本部の情報管理課長をしておりました。昼の臨時ニュースが流れるのを見ておりましたら、映像では福岡空港で飛行機が黒煙をあげて炎上しておりました。これはもう大変な事故になったと、私は思ったわけです。おそらく県警としては空港警察署に現地対策本部が設けられるだろうと、そして、おそらくものすごいマスコミからの取材があつて、被害者家族からも問い合わせがあつて大変だろうと思いました。実は私、昭和46年に県警に初めて広報課が発足し、発足当初から、3年間広報課で勤務し、マスコミ対応をしてきまして、その後門司警察署、中央警察署それぞれで副署長として報道対応してきた経験がありましたので、これは大変な事になると脳裏に浮かんできたわけです。

報道対応で何がもっとも重要かといいますと、乗員乗客の正確な人数や人定が把握出来るか、これが一番ポイントなのです。そういった事から私はこれは大変な事になると思ったので、すぐさま情報管理課のベテラン警察官二人にノートパソコンを持たせて現場に急行させました。彼らはベテランですからエクセルというパソコンソフトを使って現地本部に報告されてくるおびたしい錯綜した情報を着実に集めながら、乗員乗客名簿を作成したのです。そして情報の中から死者の氏名とか、性別、負傷者の人定とか、県内の何処の病院に運ばれているとかいうことを的確に打ち込んでいって、それがわりと早く報告出来たのです。そのために非常に的確な報道が出来たという事で、これは県警としてもすごく良い結果を出せました。私はこの事例を考えますと、この様な大事故の時には、やはり自分の部門で何が出来るかを考える、判断する、そういうことが大切だと思ったのです。混乱した現場から要請を受けてからやおら立ち上がっては間に合わない。失われた時間というものは取り戻せないというこ

とを改めて感じたわけです。

次はパトカーの緊急走行における交通事故です。昭和16年から私は北九州市警察部に勤務したわけですが、市警察部が北九州地区の警察署を支援する形でパトカー50台、白バイ数十台を使って各管内を回って治安を守る支援しているのですけれども、どうしても緊急走行してしまいますと事故を起こしてしまいがちです。この時も自分は緊急走行しているから直進車は止まってくれるだろうと途中から交差点に入って右折したわけです。しかし、対向車が停まってくれなくて、ぶつかりまして重傷には至りませんでしたけど、新車のパトカーを大破させて、全く使えなくなりました。こういうふうな事を考えてみますと、いくら緊急自動車といえども赤色灯を点灯し、サイレンを鳴らしながら走行していてもそれは危機管理にはならない、やはりその間には相手が緊急性のある車に乗っているのか、あるいは、ラジオ、音楽を大きくして聞いているかも知れない、そういう事を、そこまで予想して緊急走行しなければいかん、色々なリスクを考えながらしなきゃいかん、という事と日頃警察官には言っておるのですけれども、いざそういう場になった時になかなかそういう対応が出来ないという問題点を改めて感じた所であります。

危機管理の一番のポイントは事実を正しく把握するという事と、それから体験的にいえる事は、大きな事件では慌てて報道対応しますが、たいがい情報というものは正確に伝わらない。そのために情報が二転三転して行ってその度に結果的に大きなリスクを背負うことになるという事を感じたわけであります。色々話したいのですが時間の制約もあるようですので、このあたりで次に回したいと思います。

山本教授：ありがとうございました。正確な情報の重要性という事は、先ほど基調講演で柴田先生からお話があった事と共通しているのではないかと思います。また後でディスカッションの時にその点についても議論してみたいと思います。それでは引き続き渡辺先生にプレゼンテーションお願いしたいと思い

ます。よろしく願います。

渡辺氏：渡辺でございます。私は消防に40年少し超えるぐらいおりましたので、その中から体験談を一つお話させていただきます。阪神淡路大震災、先ほど柴田先生からもお話がございましたが、我々防災に携わっております者も含めて、たくさんの機関に非常に重要な教訓、課題というものを残しました。その中で消防にとって一番大きな課題というのは応援態勢という事でございます。阪神淡路大震災ほどの規模でないにしろ、大規模な災害が発生いたしますと、地元の消防本部の対応だけではとても手に余るため、当然そこ以外の所からも応援出動というのが期待され、求められます。阪神淡路大震災の時はどうもこれが上手く行かなかったようだと聞いております。通信の途絶という話もございましたが、そういう事もあったのだと思います。特に消防の応援というものは災害の初期の段階で非常に重要であります。火災が多数発生する、瓦礫の下に沢山の人が閉じこめられる、そういう状況でありますので、当然早い段階で応援をするということが必要となってまいります。どうもそのあたりが上手く回らなかったようです。そこで、国を挙げて応援についての議論がなされて、全国規模の応援というのはもちろんですが、ほんの身近な例えば一つの県の中での応援といったようなものにつきましても検討がなされました。福岡県では福岡県消防総合応援協定というものが出来上がりました。そうして、何か大きな災害がありましたらお互いの消防が応援し合おうというシステムが出来上がったわけです。

それから数年経ちました。2002年2月22日、2222と非常に覚えやすいのですが、JR鹿児島本線下り線で電車が電車が追突するという事故が起きました。ご記憶の方もおられると思いますが、事故の原因は先行する電車がイノシシを跳ねて、夜9時40分ぐらいだったと思います、電車がイノシシを跳ねたために緊急停車をして確認をしていました所に、後続の電車が追突をしたというような事でございます。ですから前の電車、後ろの電車合わせて乗客がかなり

乗っていたようで、負傷者もかなり出ております。その事故の第一通報というのは電車に乗っていた乗客の方が携帯電話で119番しております。携帯電話からの119番通報というのは、電話を掛けた地点の所轄の消防本部に今は行きます。ところが、当時はまだそこまでの基盤は整備されていませんでしたので、県内を4つに分けて代表的な消防本部にまずいったんかかって、そこから所轄に電話を転送するという事でありましたので、北九州市以外の所であるにもかかわらず、第一報が北九州市に入ってきた。そういう事もありまして、すぐ地元の本部に電話を転送いたしました。それと同時に北九州市としては、これは大事故だと思ひまして、ただちに応援要請があるということを想定いたしまして、準備をしました。最寄りの消防署に出動準備と非番員招集、これは応援に管外に出てしまいますと肝心の自分の所が手薄になってはいけませんので、非番員招集というような事をやりました。次々と携帯電話でかかってきます。それでだいたいの様子が分かるのですけれども、なにしろ真っ暗な中での事です。電話をかける人も沢山の負傷者が居のだろうという事ぐらいは分かるのだけれども、どの程度というのはよく分からない。宗像の消防本部が地元でしたが、そこからの情報を取ろうと思ってもなかなか取れない。非常に混乱した状況の中でマスコミ、テレビのテロップが出まして、負傷者数十名という事で報道がありました。応援要請は無いが応援するに値する、そういうふうに判断しまして出動を指令しました。事故ですから救急車が3台、救出部隊も必要と考えましたから救助隊を2隊、それに寒い時期でもありましたから、沢山の救助者が出た時の一時待機場所、避難場所そういったものを確保するための大きなテント、毛布、そういったものを積んだコンテナを一つ持っておりますのでそれを付けて出動をさせました。現場に着きますと大混乱で、しかも真っ暗な中で、地元の本部も救助に忙殺されていて、という状況になったと聞いております。応急救護所を設置し、負傷した人を搬送する、そういうような事を行ったわけです。最終的には負傷者114名、幸い亡くなった方と重傷を負った方がいなかったのですが、114名を救急車で運ぼうという事になると、一台の救急

車にだいたい負傷者2名が限界です。沢山の救急車が必要です。結果的には応援が功を奏しまして地元の消防本部からも非常に感謝して頂きました。

良い事例になるかと思うのですが、実はその事で少し論議になりました。と申しますのは、通常管轄外からの応援をする場合には、応援要請というものがあるのがまず先だってあって動くというのが基本原則なのです。北九州市の場合は見切り発車的に応援したのですが、実は県の協定にも書いてあるように、「応援を頼む」というスイッチが入ってシステムが動き出すという事になっております。今回のケースでは、重大事故だと判断して出動した本部が二つあります。うち以外にもう一つあります。あとの本部はだいたい要請が無かったから見送ったという事があります。

福岡県消防応援協定を作るまでの会議に私も参画しておりましたので、計画そのものは非常によくできていると自負しておりますけれども、どんなに立派な計画が出来ていても運用するのは人間なわけですから、考え方が二つに分かれるわけです。当時、消防庁が新聞記者の質問にたいしてこの様なコメントをしております。「要請を受けて出動するという大前提に立てば、出動を見送ったことは誤りではないが、結果として北九州市は好判断だった。協定に縛られすぎず、状況次第で柔軟な対応があってもよいと思う」というコメントをいただきました。私が今日ここで申し上げたいのは、応援をする判断、事の善し悪しを申し上げるというのではなく、同じ物を見て、同じことを聞いて行動に移るまでの、見た、聞いたものから判断するという感性というものが無ければ、いかに立派なシステムを作っても、上手く起動しないものなのだなと実感をした次第であります。でもそういう人材を育成するという事について、本大学でコースを開設するということで、そういう感性をもった人材を輩出して行こうという志をもっておられるので、非常に楽しみといたしますか期待をいたしている所です。以上でございます。ありがとうございました。

山本教授：渡辺先生ありがとうございました。三浦先生のお話、渡辺先生の

お話どちらも危機というものに直面されて、どう対応されたかということを経験感溢れる描写をされて、当事者ですからとても印象深いエピソードだったかと思います。お二方の話を伺っていて思ったのは、事前の計画ですとか、そういったものはあるのです。しかし、肝心の危機の時には正確な情報が上がってこない、という事で判断というものが必要になってくるというような共通点が見えてきたのではないのでしょうか。危機管理の一つのノウハウといいますかそのようなものが臆気ながら見えてきたような気がします。それでは続きまして本学教授の湯浅先生から、今度は多少角度を変えて、もしかしたら、アカデミックなアプローチになるかもしれませんが、「リスクマネジメントと法制度」という事でご報告いただきたいと思います。よろしくお願いいたします。

湯浅教授：ご紹介頂きました副学長の湯浅でございます。よろしくお願い致します。私の方は画面をご覧いただきながらお聞きいただければと思います。私も法学部の教員をいたしておりますが、現時点でリスク法とか危機管理法とかという領域は、例えば民法であるとか、行政法であるとか、刑事法のような形で成立をしていないのが現状であります。今、法社会学学会という学会の年報、学会誌、最新号で『リスクと法』というような特集が出たり、少しずつ法律のほうでも、リスクあるいは危機管理対応してきているというような現状であります。私も法学部の教員が法制度の中でリスクなり危機管理なりを取り上げようとする、画面で見て頂いているように、かなり問題が多いと言わざるを得ない。ですので、私どもの役割は問題点をどう解決していくかにあるというふうに考えております。短い時間でございますが、問題点につきまして整理をしていきたいと思っております。まずリスクという事を色々な所で聞きますけれども、実は人によって使っている意味が非常にバラバラです。例えば一般的には「ハザードによる被害の程度に、ハザードの確立を掛け合わせたもの」をリスクと言っております。別の定義では「事象の発生確率と事象の結果の組み合

わせ」であるとか「良い結果と悪い結果の双方の発生可能性を含む」つまり、危険だけでなくプラスも含めて使っている人もいます。逆にマイナスな所だけをリスクと称している人もいます。これはどちらもかなり一般的に使われている定義なので、すでに定義からして統一性がないというのが現状でございます。リスクについて非常に有名な学者でございますアンソニー・ギレンスという人がおりますけれども、彼によれば自然界に存在するリスクと人間によって作られたリスクと二種類あります。両方のマネジメントは違います、という見方もあります。次に最近、PDCAサイクルという言葉をよく聞きます。つまりPlan Do Check Act これに乗せて行かないといけない、あらゆる業務をPDCAサイクルに乗せていかないといけない、という話をよく聞くわけでありまして。しかし、私どもの常の業務、行政における様々な行政活動がPDCAサイクルに本当に乗るのかという事について、必ずしも検証も無いのにPDCAサイクル、PDCAサイクルという言葉が先行している印象があります。例えばリスクというのは、先ほどの定義でいうとハザードであります。ハザードが起きる可能性にハザードによる被害の程度を掛け合わせたものであります。そうすると行政内部におけるハザードが起きることが前提なわけです。ところが、今日お見えの行政の皆様方に「行政は最初から間違うかも知れません」「行政は誤るかも知れません」そういう事が許されるか、というとそれは違います。とんでもありません。「行政というものは最初から完結していきやいけない。最初から間違う可能性があるのに政策として実行することはあり得ない」と言うふうに多くの皆様はお答えになることになるかと思います。つまりPDCAサイクルというものに必ずしも乗らないわけです。実は今から10年以上前に行政改革会議の最終報告で「行政は失敗する事がある事を前提にした行政制度に変革すべきだ、改革すべきだ」という事を言っています。しかし現実には、この改革の必要性が指摘されたにもかかわらず、そのような方向には法制度は動いておりません。むしろ、最近の傾向でいうと、いわゆる年金問題、あるいは事故米問題、その他世論というのは行政の失敗の可能性のある事を認め

るどころか、行政の失敗というものがもの凄く叩かれるというのがまだまだ世論の現状で、とても失敗の可能性を前提とした行政法体系にはならない、なる段階になっていないのではないか、という気がするわけでございます。あるいは、もっと厳密に、理論的に刑事法の様な精緻性が要求される領域で、失敗の可能性を認めていいかという事について、まだまだ論議の余地があるようであります。

さらに定義の問題を続けます。本日のシンポジウムのサブタイトルで、リスクという言葉と危機管理という言葉を両方使っております。これはある民間企業のA社、B社、C社、D社のそれぞれの社内マニュアルでどういうふうに使っているのかというものを一覧にしたものでございますけれども、リスクという言葉に危機事象という言葉を当てていて、リスクという事をマネジメントするリスクマネジメントに危機管理という言葉を当てている会社があります。B社です。おそらく一般的にはDです。D社の方を皆様お使いなのだろうと思いますが、しかし、B社的に使っている所も現にあるわけで、リスクと危機管理の使い分けというのが全然きちんとしていない。しないままにどんどんリスクや危機管理という言葉が進行している、という現状なのです。したがって、どこかでこの辺の定義は整理をしないと、やがて混乱を招くだろうというふうに思われます。この定義の問題についてはどこかの段階で、今申しあげたように狭義のリスク、狭い意味でのリスクと広い意味でのリスクという事を少し整理してあげる必要がある。これは法制度の課題だろうというふうに思います。

次にどうやってこのリスク、危機管理という考え方を現実のものにして行くのか、法制化していくかという事でございます。こういう話になると、「〇〇基本法を作ればいいじゃないか」という話になるのです。「リスクマネジメント基本法を作れ」とか「危機管理基本法を作れ」とか。今、日本に〇〇基本法というものが大体35法あります。一番古いものは原子力基本法で、最新の物は生物多様性基本法です。じゃあ「リスクマネジメント基本法」「危機管理基本法」

を作ればよいか。実は私がこの35法を全部調べまして、どの程度、どの法律がどういう事を規定しているのか、というのを調べました。ご注目いただきたいのですけれども、真ん中のあたりで「国民の権利や国の具体的義務、許認可権限」をきちんと入れてある法律は10%に満たませんでした。つまり、90%の〇〇基本法は「こういうようにしましょう」と言っているだけである。という事です。さらに、字が小さくて申し訳ございませんが、〇〇基本法の類を主成分分析という統計的な分析手法にかけました。その結果明らかになった事は、4種類あります。この手の法律パターンが。1種類目は全部、色々な理念からなから全部あげてある場合。あるいは、国民に対する責任、アカウンタビリティの所を特に重視してあるもの。国の理念だけを謳いあげたもの。自治体はかなり広い提言を与えたもの。この4パターンです。さて4パターンのうち、どのパターンを使えばリスクマネジメントや危機管理が本当に行われるような法制度、自治体で言えば条例になるのか。これは今後の課題で検討していかないといけない。その際には国民の具体的な権利義務、義務違反あるいは義務に対する制裁はどの程度まで入れてよいか、という事を考えて行かないといけない。これが私ども法学部にとってのリスクあるいは危機管理を法律に取り入れる場合の課題だろうと現在私は考えております。どうもありがとうございました。

山本教授：ありがとうございました。突然定義の話になって、皆さん分からなくなってしまった所があるかもしれませんが、リスクマネジメントとかリスク、危機を考える際に、まず問題になってくるのが、色々な分野でリスク、リスクマネジメントという言葉が使われていて、それを整理するだけでも非常に大変なのです。それを今回のシンポジウムでは整理しない形で行こうといったこともあるぐらいです。今、湯浅先生が言われた中には、社会のリスクという分野もありますし、組織のリスクという分野もありますが、それとは別に企業
のリスクマネジメントや財務のリスクマネジメントという分野もあります。企

業の側からのリスクマネジメントという事を本学教授の古屋先生からお話いただければと思います。では古屋先生お願い致します。

古屋教授：私は学部でもって企業法務というビジネスに関係する法律を教えております。企業法務というのは分類しますと、治療法務と予防法務というふうに分けて、病気に例えて説明しております。病気になってしまってから薬を与えるのが治療法務で、法務的なリスクや事故が生じた場合それをどう回避するかという分野です。病気にならないうちに色々手を講じる、これを予防法務というふうに呼んでおります。これらはいずれも、今日の題目のリスクマネジメントそのものになるので、実際の例をとってご説明したいと思います。

私はこの大学に来る前に約35年間プラントを海外で建設する会社におりました。その時の事例をとってみたいのですが、日本でプラントの専門会社というのは私が勤めている会社を含めて現在も3社しかありません。1970年の終わりから80年代にかけて、日本が全世界的に、どんどんどんどん伸びてやがてアメリカも追い抜く、世界中で一番リッチな国と言われて、日本人は金持ちだという事で、世界中で日本人が身代金目当てに誘拐されるという事件が頻発しました。私はその当時企業法務課長をやっておりましたが、親しくしている同業の企業法務部長の会社で、タイ駐在の社員が誘拐されるという事件がありました。だいぶ前なので皆さんはご記憶ないかと思いますが、当時は新聞でも大騒ぎになりました。それが幸い数ヶ月かかりましたが誘拐された社員は無事に戻ってまいりました。それで早速その企業法務部長を訪ねまして実際にその企業が行った対策をヒアリングしました。

その企業は、誘拐事件がおきたときにまず、会社の中にその企業法務部長を長とする対策本部を作ったのです。その企業法務部長はまず最初に、事務所の入り口に一番近い所に大きな部屋をとって、新聞社をはじめとするマスコミ関係に全部入ってもらった。つまり報道関係の専用の部屋を作ったわけです。そこにコーヒーマーカや飲み物用の電気冷蔵庫、電話・ファックス等必要備品全

てをずらっと入れまして、そこでもって一切の報道関係の発表を行ったということでした。なぜそのような事をしたのかといいますと、さきほど三浦先生からも報道関係のお話がありましたけれども、報道関係と従業員の間をシャットアウトすること、これが最大の目的で、これに一番気を碎いたといいます。なぜならこのような誘拐事件で一番傷ついて心配するのは、いうまでもなく攫われた本人の家族です。その家族は誘拐された本人が今どのようになっているのかを刻々と知りたいわけです。それを会社がタイムリーに説明していけば良いのですが、時として情報が企業の社員から報道関係にあっちこっち流れてしまつて、それが報道関係から遺族の方に伝わる。このような状態が生じると遺族の方々は非常に不安に陥るのです。会社にも「あなた達は何も知らしてくれないけど、他の所からこんな情報がいっぱい入ってくる」と言う苦情が寄せられ、大混乱になる。それをこの企業法務部長は解っていたのです。まずそこをシャットアウトして対策本部長を通じてのみしか情報を社外に伝達しない。そういう体制を敷いた。これはまさに、最初に言いました治療法務、リスクマネジメントの中ではクライシスマネジメント、實際上、何かが起きた時にどの様に解決するのか、というマネジメントに入ると思うのですが、その一例であります。

もう一つは予防段階のリスクマネジメント事例です。私がこの大学に来る前に、西アフリカのナイジェリアというところで仕事をしておりまして、一ヶ月に一回はそちらに行って契約交渉の仕事をしていました。そこは非常に治安が悪い。クーデターがしょっちゅう起きますし、加えてマラリアと黄熱病の国という大変な所でございます。そこで日本人が行って一番困ってくるのが食べ物なのです、日本食がなかなか食べられない。それで唯一の救いが日本から世界中に商社が持っているネットワークでした。ナイジェリアにも大商社が殆ど現地会社や駐在員事務所をおいてまして、その駐在員の自宅に呼ばれてそこで日本食をご馳走になるというのが最大の楽しみだったわけです。最初にナイジェリアを訪れたときのことで、所長の家に早速招待され、日本食が食べられ

ると喜んで行きました。所長の家に行きますとまず驚いたのが、玄関を入ろうと思ったらそこには厚い鉄の扉が関所のように立ちはだかっているのです。周りの窓は太い鉄格子が付いている。日本でも飾りの鉄格子なんて付いていますがあんな物ではない、直径一センチ以上の鉄棒の格子です。それで全ての窓が要塞みたいになって囲われています。その玄関の扉を開けて中に入る。そこが居間になってます。招かれますとその家の中がどのようになっているのか見せてくれる事がよくあるのですが、二階に行こうと思ったら驚いた事にまた同じ鉄の扉があって、それを開けないと二階へは行けないのです。二階へ行くとさらに驚いたのが、子供部屋などがあって、一番奥に主寝室があるのですが、主寝室の前にまたくだんの鉄の扉がある。「なんなのですか」と半ばあっけにとられて聞きましたところ、しょっちゅう暴漢に襲われる、強盗等が頻発する、しかも持っている武器が日本のようにナイフとかそんな半端なものではないらしいのです。自動小銃や手投げ弾などはごく普通。という事は、まず家に入られないように玄関で防ぐことが必須ということです。ドアを破られて入られた場合は二階へ逃げてそのドアで防ぐ、それでも入られたら、最後は寝室だ、ということです。その間に連絡をとって助けが来るのを待つわけですが、そういう危機に対する考え方は、我々日本に居たら到底考えられない事なので、これを目の当たりにしてびっくりしました。更に感心したのは、こういう治安の問題は危機に直面した者だけが分かることではなくて、情報をあらかじめ会社の総務なり人事なり専門の部署が世界中を回って情報を集めて現地に必要な対策を教えていく全社的なシステムをとっていることです。これは一つの予防法務、リスクマネジメントの一つだと思うのですが、これも予防法務の一事例です。一番良いのは予防法務、未然に防ぐことなのですが、それでも駄目になった場合は元に戻って治療法務、与えられた場でいかに効率よく解決するか。この循環が一つのリスクマネジメントではないかと思っております。以上でございます。

山本教授：ありがとうございました。企業法務の立場から、治療法務、予防法務といった話をいただきました。それでは、パネリストの方々のプレゼンも終わった所ですし、今までの基調講演、プレゼンテーションを含め、私なりに思ったことを論点という形で提示してそれに対して、それに対してパネリストの方々、そして基調講演をされた先生方を含めて、議論ができればいいかなと思っております。まず第一点として、様々な危機というものに対してどう対処したかとか、リスクマネジメントの定義とか色々ありましたけれども、それでは危機管理、あるいはリスクマネジメントの考え方というのは、基本的には一体どういうものかといえるのだろうか。何か方法論といえますか、考え方、発想、アプローチといった事をお話いただければというふうに思います。今までのパネリストのお話も含めて、リスクマネジメントとは一体どういうものなのか、少しここでまとめさせていただきたいと思うのですが。

古屋教授：色々な所から最近リスクマネジメントという本が沢山出ておりまして、似たような事が言われています。2001年3月には、JISQ2001としてリスクマネジメントのプロセスが公表されております、かなり細かい事なのですが、それを頭に入れて私なりに考えてみると、リスクマネジメントとは、先ほどPDCAと言いましたが、循環のプロセスではないかと思います。先ほど湯浅先生から定義のリスクは色々あって定義をしないといけないとありました。實際上ビジネスの中で自分の企業関係の中、周りを見てどういうリスクがあるのか特定する、評価する。これから始まらないとターゲットが決まらないのです。ですからリスクが何なのかを決める、このための一手段としてリスクマッピングという方法を使います。リスクの特定をしましたら、次にそれに対処する目標・方針を企業として決めます。企業でなくても、お役所でも同じ事です。トップの責任者というものを決めるのですけれども、その次にやるのがマネジメント戦略。リスクの特定、方針もだいたい固まったので、戦略を具体的に立案するのです。実際に色々なリスクの項目があるのですが、これはとて

も大変な事だから回避しようとか、それを受け入れて出来るだけ管理して軽減していこうとか色々な方法があります。そういう立案の段階から、企業、または組織の中でインフラを構築することになります。これは色々な組織とか、技術的な事とか色々あります。そしてそれを使って実行するわけですが、重要なのはその後、常に実施状況を評価する、疑ってみる。実際トップの者が下の者にこういうふうにマネジメントして対応するように指示したけれど、実際上行われているのかを検証・評価するのです。例えば、コンプライアンスについてしっかりやっていかなければならない所を、実は現場では法令違反しているのではないかと、といったように評価していかなければならない。そしてその評価に基づいて改善をしていかなければならないし、その改善に基づいて、どんどんリスクの影響度・発生頻度が変わってきますから、再びリスクの特定をし直さないといけない。この循環がリスクマネジメントのプロセスだと思います。この手法は色々な所で似たりよったりのことが言われております。

まず、リスクマッピングといわれるはじめのリスクの特定が一番重要だと思います。縦軸にリスクが起きた時の損失の大きさ、横軸は発生頻度、どのぐらいの確立で起きるのか。これを専門の手法を用いて實際上自分の企業なり、組織にあわせて事例をマッピングしていくのです。一番重要な所は右上でして、発生頻度が多くていったん起きたら非常に大きな損害を受ける。ここに何が入るのが要注意です。その反対に斜め左、発生頻度が少なくて、起きてもたいしたことない。これは半ば無視してもよい。このようなマッピングをするわけです。これは組織によって違います。真ん中に戦争・内乱がありますが、これは私が勤めていた会社ではこの位になるのですが、日本国内では戦争・内乱というものは関係ないですからずっと下へ降りてきます。ですから、企業ごとの環境によってリスクマッピングが変わってきます。重要なのは自分の環境においてリスクマッピングを作って、特定する。それについてぴったり合った対応をしていく、こういうやり方が一つのプロセスだと思います。長くなりましたが以上です。

山本教授：ありがとうございました。今の古屋先生のお話は、最初にリスクを特定して、それに対してあらかじめ準備をするということです。先ほど先生方からお話いただいたの方法は危機が起きたときにどう対応されたか、という内容でした。例えば柴田先生からは、阪神淡路大震災の時に、無我夢中で対応されたという話が出ましたが、その後内閣府で危機管理のお仕事をされた時に、やはり危機が何であり、危機が起きたらどう対応するかという危機管理方法を使って、それに基づいて戦略を立案するという発想のもとでお仕事をされていたのでしょうか。ちょっとそのあたりをお伺いしたいのですが。

柴田氏：山本学部長さんのおっしゃるまさにその通りなのです。内閣府の時に私がいつも気を付けて仕事していたのは、今おっしゃった事が一番重要だと。大きな災害が起きて、バタバタ、バタバタ走り回っていると、世の中の注目は集めますし、テレビに出るし、マスコミは出るし大変だと、大騒ぎになるわけです。しかし、私はそんなものはワン・オブ・ゼムだよと。我々の仕事は何か起きた時にどう的確に答えられるかを蓄積していかなければいかんという事で内閣府の防災基本法というものに基づいて、内閣総理大臣が会長で、すべての閣僚、NHKを始め公的機関の長が入っている中央防災会議というものがあり、年に4回開催されるわけです。その下にそれぞれのテーマに基づいて専門委員会として勉強会を作っておりました。例えば、首都直下地震が起こった時はどう対応するか、当該東南海地震はどうするか、富士山の噴火の時はどうするか。それから、BCP (Business Continuity Plan)、企業にとって重要なものをどう整備するのか、というような事でずっと勉強して蓄積しております。その蓄積が深ければ深いだけ我々の対応は楽なんです。阪神淡路は全くの0からのスタートでした。とんでもありません、あんな事にならないように、どれぐらいの首都直下であれば規模の地震が起きるか、どれぐらいの被害がどのぐらいの地域に起きているのか。その時に誰がどう対応していくのかということ、国は公共団体や民間の方に入って頂いて決めていっております。その通りにた

ぶんなるかどうかと言われた時には、それは色々なやっばり事態によって状況は違ってくるとは思いますが、いずれにしてもそういうものをずっと蓄積していつにという事は事実でございます。

それからもう一つ、日本社会がリスクを非常に感じにくい社会になっていると思います。これは素晴らしい社会だと思います。先ほどおっしゃられていましたけれども、アフリカではそれぐらい日常茶飯事だと。日本ではそんな事はあまり無いです。水と安全は本当にそのままある時代です。それから大きな災害等があっても関係があるとは思わないのです。阪神淡路大震災はありましたが、これはまさかという感じです。小さな災害は毎年ありますけど、大きな大災害は100年、200年単位で動くわけですし、それを覚悟出来ない。これは教育の問題等にもよるのですが、それを教えて来ていない。例えば東海地震が起きたのは150年前で江戸時代なのです。あれだけの災害となったスマトラ地震と、インド洋の大津波は、日本列島ではしょっちゅう起きる。繰り返し起きている、150年前といえば江戸時代。社会が遅れている、近代化が遅れている。そういう時代と、今社会が発達して科学が発達して、年がら年中空調が効いていて、快適であって、年がら年中明るくて、夜は無い。そういった中で、昔と違うよ、我々は自然を征服したのだというような気持ちをますます持ちがちです。けれども、地球規模の災害リスクはあるのです。そこを教育で教えなくちゃいかん。「稲村の火」というものがあるのです。ご存じの方はこの中では少ないと思います。戦前、小学校の読本で教えていました。これは安政の大地震の時に和歌山県の広村、今の広川町の庄屋さんが安政の大地震、東海地震が起きた時に自分の家の刈り取った稲を夕方全部焼いて、みんな「庄屋さんの家が火事だ」と言って山の上に行ったら「消さなくていい、消さなくていい」と。みんなが来た所で津波が来て村人が助かった、という「稲村の火」というものがあります。これは小泉八雲の『生ける神様』に書かれているのですけれども、昔の子供達はみんなそれを知っていたのです。けれども、今の子供達は知らない。この前のスマトラ、インド洋の大津波の時にASEANの首脳会

議では私も小泉総理と一緒にりましたが、マレーシアの首相から「あの稲村の火の話は本当か」と聞かれた事がありました。常日頃から外国は知っているのに、日本は忘れてしまった。「稲村の火」とはどういう事だという感じですが、それでも、そういう事を教育の現場で常に知らせてないと大変だと私は思います。「災害は忘れた頃にやってくる」、「天災は忘れた頃に来たる」寺田寅彦の言葉なのですが、私は災害・天災は忘れた頃にはやってこないといつも言います。200年も300年もお爺ちゃんやその前の人達の時に来た。だけれども必ずやって来る。というような事で事前の準備は本当に出来るだけやっておかなくちゃいかんと思っています。

山本教授：ありがとうございます。そういう意味では、これまでどういった危機が起きて、それに対してどう対応したかという、いわばケースや事例を大学で沢山紹介していくという事は非常に重要な事ではないかなと思っています。今、柴田先生がおっしゃった事前の勉強や準備、先ほどの古屋先生のお言葉でいえばリスクの評価や特定、そういったことが非常に重要だというお話でした。渡辺先生にお聞きしたいのですが、消防応援態勢について、大規模な事故だとかそういったものが起きた時に、どう対応していくか、どう応援態勢をとっていくという事は事前に計画され準備されていたわけです。ところがその事前のマニュアルだとか、手続というものが、大きな事故が起きた時に自動的に動かない事があるわけです。渡辺先生はその時の状況判断だとおっしゃいましたが、結局事前の準備だけでは危機管理、リスクマネジメントというものは難しい部分があるのではないかというふうに感じたのですけれども、そのあたり渡辺先生いかがでしょうか。

渡辺氏：全くおっしゃる通りでございまして、災害というものが発生をしますと、その態様、その形は千差万別であります。ですから応援協定というものは非常に基本的な行動を示した一つのパターンだと理解をする必要があります。

いざ災害が発生しますと、その計画は災害の状況から当然ながらずれていきます。ずれていくというのをよく承知しておいて、なおかつその計画準備したものを活かしていくという、ちょっと変な言い方かもしれませんが、災害というものは大体そういうものだとか経験則的にそう思っております。どこかで、計画通りに進まない部分というものは当然出てきます。それを補うのがやはり人間の知恵と感性というようなもので、途切れた部分を修復しつつ全体の完成を目指す。というような姿勢が非常に重要なのではないかと考えています。むしろ、災害が発生した時に計画通りに動かない事の方が多いと先生がおっしゃっていましたように、準備を十分に進めて最適に対応するという事を考えますと、あまり計画にとらわれて、思いこんでしまうと、かえってスムーズに行かないという懸念も生まれてくようかと思ひます。

三浦氏：私もそのように思ひます。警察も非常にリスクの多い仕事に対応しているわけで、本当に色々な規定とかマニュアル的なものは沢山あるわけですよ。いざ事件が起こっても前と同じ事件が全てあるわけではなくて、時間とか場所とか対応方法とかは、ほとんど違ってくるわけですよ。マニュアルの中身にはだいたい完璧を期しておりますので、色々な体制が整った形でマニュアルが出来ていますが、その時に人数が足らない、機材が無いとか、時間的に色々な物が無いという状況の中で、その危機を乗り越えて行けるように勉強するのもリスクマネジメントではないかと考えております。あるものがすべてそろってれば、完璧に物事をやる事は誰でも出来るわけですから、少ない物、色々な物が足りない状況の中でいかに自分の頭を働かせてその中でリスクを回避していくか、という力を養う、その部分に法学部のマネジメント・コースの良さがあると私は感じているのです。

山本教授：危機というのは、まさに今まで経験した事がない事が、地域や企業や組織で発生するわけですよ。それに対してはあらかじめ準備をしておいて、こ

ういう危機が起きたらこういうふうに行動すると言するような計画を立てることが重要だと言われます。これがリスクマネジメントの基本的な考え方です。しかし実際に、例えば災害対策マニュアルというようなものを作っていけばそれで良いかという、そのような事は決して無いわけです。危機が発生した時の判断能力が重要になってくるという話です。最初に、佐木先生が「健全な社会常識が重要なのだ」、とおっしゃいました。柴田先生も自分の頭で考えて、懐深く、度胸を持ってというような事をおっしゃいました。佐木先生がこのリスクマネジメント・コースの客員教授として就任されるという話が決まったときに、「なぜ作家の佐木先生がこの危機管理と関係があるのか」というような事をよく聞かれました。しかし今先生方のお話を聞いていて、肝心なときに働かせる判断能力というものは、様々な経験の蓄積が生きてくるのではないかと思います。哲学、文学というふうに佐木先生おっしゃいましたが、佐木先生、いかがですか。こういった危機管理、リスクマネジメントの話は、佐木先生からみてどうお考えですか。

佐木氏：私どもの仕事に、大きな事件が起きたりすると、新聞社や放送会社から電話がかかってきて、「こういう内容の事件です。どう思いますか」というような事が比較的によくあります。今まで自分が調べて書いたり、裁判を傍聴して知り得た事とか、それなりに引き出しがありますから、過去のどの事件と重なるのか、重ならないのか分かってきます。例えば、去年の事件で私が一番大変だな、問題が大きいなと思ったのは、6月の秋葉原の通り魔殺人と、11月の元厚生次官の自宅を連続して襲った事件です。この二つは相当根が深いだろうと思っております。秋葉原に関しましては精神鑑定にかけられて、元厚生次官宅を襲った被疑者も精神鑑定にかけられる事が決まったのですけれども、即座に結論が出せるわけではないわけでありまして、我々はどういう精神鑑定結果が出るのかを見守って行かなければならないわけです。ですから、非常に時間がかかる事なのですが、そこの所を熟知り顔にものを持っているという事で軽

蔑される場合もあるのですけれども、何か過去の引き出しを開けて、自分なりにこういうものを貯金というのですか、貯金からとりあえず、こういう分析が出来る、こういう事ではないだろうかと思います。我々の社会は、過去の営みから何を教訓としてこういう事件を防ぐ知恵を、社会の英知といいますか、どういうふうにしちっと取り組めるのだろうか、ということを個人の仕事ですけれども考えていくしかない。これは、犯罪事件に関してのことなのですから、長いスパンで考える、そしてまた冷静でなければならない。明日にでもまたどこかで通り魔が現れそうだと、現れそうだと慌てても仕方がないのであって、どうやって分析するのか個人の仕事であります。そして、冷静に観察して、過去の記憶、過去の経験を大切にして、もう起きてしまった犯罪についてはどうする事も出来ないわけですから、どうすれば自分の身内からこういう罪を犯す人間が出ないようにすればいいのだろう、あるいは地域社会の中で犯罪には模倣性がありますから、伝播性というような言葉も使いますが、どうやって冷静に構えていこうか。そういう事で自分なりに仕事をしていくしかないのではないかというふうに考えております。

山本教授：ありがとうございます。例えば準備をしていく、危機管理の場合マニュアルを作る、手続きを定める、計画を立てる、という事もできるのですが、そのときの状況判断、判断能力というものが非常に重要だという話の続きをさせていただきます。柴田先生、三浦先生、渡辺先生にお伺いします。柴田先生は阪神淡路大震災の時に仮設住宅の着工を翌日から始めて杭を打つと。これは通常の手続きとしてやったのでは出来ない事を判断されたわけですね。三浦先生は情報伝達がいかに重要かという事を判断され、情報を収集されるという所に力を注がれた。渡辺先生は大きな事故になるという事で応援の決定をされた。こういった判断能力というものはノウハウ化しにくいものではあると思うのです。ただそこは非常に重要なポイントなのだろうと思います。こういった判断能力を持つために、あるいは養うために、準備をする、計画をするという

事以外にどういう視点、考え方が重要なのかというのをお三方にお伺いできますか。まず柴田先生。

柴田氏：私は、佐木先生が最初におっしゃいました常識的な物の考え方が出来るかどうかだと思います。これだけの災害だからこうしなくちゃいかん、という事は常識的な物の考え方であれば出来るわけです。あれを知っている、これを知っている、こういう勉強をした、こうしたというのは何の意味も無いのです。本当に人間として常識的な判断が出来るのか。例えば、阪神淡路大震災では、全壊20万、半壊20万戸で合計40万の住宅が壊れてしまった。仮設住宅の建設計画は5万という計画で作ったのですが、次の住宅復興計画は12万5千という数字で作ったのです。そしたら、多くの人に40万も壊れたのに12万5千では少ないとずいぶん言われました。けど私はその時に、まず、全壊、半壊を調べさせました。全壊だと半分立て直すか、半壊は1割か2割ぐらい立て直すか、それを見ると12万5千ぐらいだったと。それともう一つは非常に常識的なものの考え方をしたのです。やられた所は神戸六甲山の手前、人口100万から150万。非常にアバウトな計算です。一世帯3人ずつで50万世帯の所がやられているわけです。40万作れと言われてたら8割です。8割壊れているかという、100%壊れている所、燃えている所は確かにありますけれども、どうみても8割は壊れていないのです。色々な方が少ないというので、「貴方どのぐらい壊れたと思いますか」と言う、「3件に1件、4件に1件」そうすると、「十数万じゃないですか、40万にはならないでしょ」と言う、相手が納得する。やっぱり常識的な判断が非常に重要なのではないのでしょうか。そういうことを養っていく事が必要なのではないのでしょうかと思いました。

山本教授：えてして組織の中で仕事をしていくと、組織の論理というものに毒されるといって、そちらが優先して常識というものが効かなくなるというような事が色々な企業の不祥事だとか事故災害の時によく見られる事だと思うので

すが、渡辺先生いかがですか。応援の決定を行ったその判断というものは何が基準だったのですか。

渡辺氏：先ほど、話をしました事例で申し上げれば、災害の規模を想像することと努力を傾けるということです。そういう事では電車に電車が衝突すれば当然これくらいの被害が出ているだろう、という事はわかる事で、あとはただ手続きがきちんとなされたか、なされていないかという事だけがネックとなっているわけです。この判断はそう難しい事ではないと思っています。少し抽象的な話になりますが、だいたい我々は、現場経験といえますか経験則から学んでいくのです。その職について40年というその期間の中で経験則的に学んでいくという部分が非常に大きいわけです。だから、そういうものを大学という場であらかじめ体系的に学んで行くという事によって判断力が事前に養われていくのではないかというふうな期待を持っている所です。経験則で色々な事を学ぶと申し上げましたが、1人の消防士が若い頃から退官するまで勤務して、初めて経験するような大規模な災害を度々経験するような事はまずありません。一生のうち何度かしかないのです。テレビでよく大きい災害があって、マイクを向けますと、かなり年配の方でも「私にとって一生に初めての事です」とこういうふうにお答えになるのが大多数なのです。つまり、大災害とは、一生のうちに一度経験できるかどうか、体験するかどうかというようなものが非常に多いわけです。だからそういう形のものを自分で体験するというのは非常に難しい。ですから、そうしたエキスをいかに吸収できるかという事だろうと思います。そのためには色々な文献なんかも出ていますので、やはりそういったものを読む、そういったものについて話を聞くという事で感性が養われるのではないかと思います。お答えになりましたでしょうか。

山本教授：有り難うございました。三浦先生いかがでしょうか。

三浦氏：私の場合は警察に在職中、四六時中緊張している状態が続きまして、夜中にかかってくる電話で良い電話は一つも無かったです。夜中にかかる時は気構えて、この時はどうしようという感じで電話を受けていました。ですから県警察を退官した後は何となく、昔から鎧を脱いだという言い方がありますが、心が非常に軽く感じました。現職中はそれだけ緊張して対応しなければいかん、という心構えはあったような気がします。その心構えというものが大前提としてあり、治安責任を果たすためには、この時はどうしようかというような事をいつも頭の中で考えていた気がします。

山本教授：ありがとうございます。常にスイッチをオンにしておく、というような言い方がありますが、そういう事なのかなと思います。時間もだいぶ迫って参りましたので、次の論点に移らせて頂きたいのですが、よく考えてみると、法律学とリスクマネジメントというものはなかなか両立させて考える事が難しいという事は、先ほど湯浅先生がプレゼンの中でご指摘された事です。では逆に湯浅先生にお聞きしたいのですが、法学部の学生がリスクマネジメント、あるいは危機の対応、こういったものを学ぶことによって何が得られるのだらう。法学部でこういったリスクマネジメント・コースという事を始める事でどういうメリットがあるのだらうか。水と油ではないのかという見方もできるのですがその点いかがでしょう。

湯浅教授：私は2つあると思うのです。個人的な感想でいうと、今時の学生さんは幸せだなと、何故か。実は私今流行っているアラフォー世代でありまして、アラウンドフォーティー、40歳前後であります。私が学生時代の事を考えますと、まさに大学レジャーランドでありましたので、およそ遊び回って過ごしてきました。ところがいざ社会人になってアラフォーになってくると、突然こういう非常に不確実な世の中に突然投げ込まれて、どうしたらよいのだらうと。今企業の中では実は30代で鬱病になっている人が一番多いわけでございます。

だから今からそういうこれからの社会の生き方というものを、警察官になる学生さんも、民間企業に入る学生さんも、消防官になる学生さんも、自衛隊に入る学生さんも、あるいは自分で何かビジネスを起こそうとする学生さんも、その備えを、どんな専門に進もうともその備えを、教育機関で与えてもらえるという羨ましさというものが一つあります。もう一つは実は私ども教育機関でありますので、今日おいでの先生方から先ほどから色々体験に基づいてお話いただいている事を体系的に整理していかなければならない。体系的に整理をした上で学生さんに私どもが教育をする必要があります。例えば今日お話を承っていますと私三つぐらいだろうなと思ったのです。一つは備えあれば憂いなし的なお話です。マニュアル作りの必要性。もう一つは一寸先は闇的なお話です。柴田先生がおっしゃった天災は忘れた頃どころか、もっと後からやって来るといようなお話。それから最後にただより高いものはないといようなお話です。つまり安全や安心は行きすぎると、これはまさに、絶対に安全な食品なんてあり得ないのです。あるいは絶対に安全、安心な社会はあっては逆に危険です。おそらく犯罪が一件もない世の中にしようと思ったら、私たちの自由は全く無くなってしまう。そういう三つの要素のバランスを私どもが教える事に意義があって、それをリスクマネジメント・コースで是非学んで頂きたいなというふうに私は思っております。

山本教授：元々なぜ法学部の学生に公務員志望が多いか、警察官になりたいという学生が多いかというと、警察に入ってから昇進試験で法律科目が多いからです。法学部の学生は有利なのです。それに法学部の学生は真面目に勉強しますから、公務員試験もパスをして、その後も活躍をしていくという事なのです。しかし、ただ法律だけを勉強して良い警察官になれるかというと、そんなことではないという所から、このリスクマネジメント・コースという構想が膨らんでいきました。そのあたり、法律学を勉強する学生に対して、危機管理というものの方の重要性は、三浦先生どの様にお考えでしょうか。

三浦氏：確かに警察に入りますと、警察は法律に基づいて職務を執行するわけでございますから、あらゆる法律を勉強していく。その間に各種昇任試験を受けていくという事になりますと、大学で法学的な感覚を養って警察に入るという事は非常に有利なことだと思います。それから警察の仕事というのは、皆さん方ご存じの通りリスクを伴う仕事で、全てが上手く行くわけではなくて、マイナスの時もあります。そういった時に自分が職務執行した内容について、正しく説明する説明責任というものが課せられます。すべて上司に任せるのではなくて、自分自身もはっきり自分が職務を執行した事についてこうだと言える法学的な知識というものは、これからさらに必要となって来ると思います。そういった事で私は、この法学部でリスクマネジメントをやる意義は大きいと思っております。

山本教授：ありがとうございます。時間も迫ってきていますが、私、最後に佐木先生にお伺いしたいことがあります。というのは、私自身、学生に対して、どうやって勉強したらいいか、何を勉強したらいいのかとよく聞かれるのです。その時、語彙力を増やしたいとか、リテラシーの問題ですとか、もっと頭が良くなりたいとか、そういうことを学生に言われる時に、必ず私は「小説を読め」というふうに言うのです。私自身、社会人基礎能力とか、問題発見・解決能力といったことを大学で身につける事が重要だと思っているのですが、それにも関わらず学生には「小説を読め」と言います。そして、実際に本を読む学生、小説を読む学生というのは確かに伸びていくのです。小説、文学の効用、文学に効用を求めること自体そもそも間違いなのかもしれませんが、学生にとって文学、小説というものはどういうものかというふうにお考えですか。ちょっとリスクマネジメントから離れますが、是非これを私佐木先生にお伺いしたかったですけれど。

佐木氏：私は、10年以上前に亡くなった埴谷雄高さんを尊敬しているのですけ

れども、哲学的な小説を書く方で『死霊』という作品が代表作なのですからけれども、時々お酒を飲みながらお話を伺う機会がありまして、埴谷先生がいつもおっしゃっているのは「文学とは何か。人間という不可思議な生き物の正体に何処まで迫られるかである」とであると。それに、「君は裁判傍聴とかして、なかなかいい所に目を付けた」とも言われました。確かに被告席にいる凶悪犯罪を犯したような人は検察が総力を挙げて捜査していますから、検察官が選りすぐって法廷に証拠として色々な人の供述調書、もちろん本人の調書も含めてですけど、一級資料が法廷に集まるわけです。もちろん被告人の防御権を行使する弁護人も存在しますが、そうして検察側と被告・弁護側が争い、最終的には裁判所が判断するという流れがある。私は一つの裁判が始まったらなるべく、継続して傍聴取材する事を心がけています。そうすると被告席にいる彼ないし彼女がだんだんだんだん丸裸にされていくのです。今申し上げたように、検察官が追求する、弁護人はまた別の視点から弁護活動をするだけでなく、被告人自身がものを言いますし、先ほど申しあげました広瀬健一であるならば指導教授が証人として登場する、林郁夫であるならば主任取調官だった警部補が登場する。色々な証人が出て参ります。そうすると何か見えてくるのです。その人の生き様も見えてくるし、被害者なら被害者の事情も分かってくる。その面白さ、面白さと言うと面白おかしいと混同されるのですが、広辞苑なんかを引いてみますと、目の前が夜明けを迎えるように、面が白くなるという言い方があります。だから見えなかったものが見えてくるという面白さ。面白さというものは本来の言葉の原義はそこなのでありますけれども、だからやっぱり学生に本を読むように、小説を読むようにというのは、おっしゃっているのは非常に大切なことだと思って、ある種のエンターテインメントは読んでも時間の無駄だと私は思っておりますけれども、ノンフィクション要素の強い小説、そのような事をいっても自己ピーアールしているようでありますけど、そういうものを読んで欲しいなと、私のことは関係ないですけど、特に法学部の学生さんには大事ではないかと思います。人間通になって欲しいわけで、人間好きに

なって欲しい。凶悪事件の犯人であっても「あ、そうか。こういう事があったからこの人間は水が低く流れるようにこんな事をやってしまったのか」とか分かる小説は結構いい、人間通になるにはいい入り口ではないかと思います。

山本教授：ありがとうございました。最初の基調講演での健全な社会常識という意味を非常に深いものとして捉える事ができた様な気がします。さて、あっという間に時間が経ってしまってもう終わりに近づいて参りました。ここで一旦パネルディスカッションは終了させて頂きたいと思います。次に質疑応答ということでフロアの皆様方からご質問を受け付けたいと思います。ただ、時間があまり無いものですから、あまり沢山皆様が一気に手を挙げられるとちょっと大変なのですが、2、3名の方向かご質問があればパネリストの我々でお答えしたいと思いますけれども、いかがでしょうか、何かご質問ありますでしょうか。こういう時に学生の皆さんは是非質問力を発揮させて頂きたいと思うのですが、いかがでしょうか。さっそく手が挙がりました。

学生：佐木先生にお伺いしたいのですが、大学生が小説を読むのが良いとおっしゃいましたけど、僕はあまり読んだことがないので、是非入門的にお奨めの小説を教えてくださいたいと思います。是非お願いします。

佐木氏：柴田先生が基調講演の中でふれて下さったので調子に乗って申し上げますと、講談社文庫で昨年出た『慟哭』、号泣するとか、慟哭するとかいう意味ですが、『慟哭—小説林郁夫裁判』という本では、林郁夫の裁判をずっと追いかけて書いておりまして、オウム真理教事件とは何だったのか、麻原の死刑判決が確定するまでのあと書きとして書いております。これは文庫ですから667円ですので、これをお読み頂ければ有り難いと思います。どうもすみません、自己ピーアールして。

山本教授：佐木御大自らにこんな事を聞くなんて、僕に聞いてくれたら、本屋に行ってみる、図書館に行ってみる。あかさたなで著者別に並んでいますよね。さの所に行く、すると佐木というのがあるのでそれを片っ端から読む、ここから始めるのが一番良いのです。実際に会ったことのある作家の本を読むというのは面白さが全然違いますから。ともかく質問ありがとうございます。

柴田氏：それから、学生さんは法学部だからといって法学の勉強ばかりしちゃう駄目です。しなくちゃいかんと思いますが、他の小説にしても、他の勉強をどんどんして下さい。幅を広げて下さい。小説もそうでしょうし。みなさん方に最初「大変幸せだね」と言ったのは、佐木先生にお越しいただいてるでしょ。私、学生時代は経済学部でしたけど、サルの話や進化論の話とかが好きで、学生時代に、今西錦司先生が七十幾つの時に、京都大学名誉教授で、岐阜大学の学長をやられていたのですが、「先生来て下さい」と言ったのです。「俺は普通は行かないけど、学生が言ってきたのだから行こう」と言って来て下さったのです。先生と色々な話をしました。最初にちょっと言いましたけど、最近インド、ベトナムに行って、帰ってみると泊まっていたホテルが爆破されたりしたのですけれど、やはり日本を外から見てみると違います。日本がどれだけ豊かでどれだけ幸せか。インドでは10円20円の単位で生活しています。子供達も沢山居ます。我々が持っているお金、ちょっとしたお酒を呑んでいるお金がどれだけ彼らのために役立つのか。我々の技術が彼らのために役立つのかというのを痛感させられます。やはり幅広い勉強、法学部の法律の勉強はもちろんしてもらって、幅広くしてもらいたいと私は思います。

山本教授：ありがとうございました。その他何か先生方最後にコメントがありましたら、よろしいですか。質問はもうありませんか。それでは14時から3時間という長時間にわたって皆さんありがとうございました。ここでパネルディスカッションを終了させていただきたいと思います。パネリストの先生方には

非大きな拍手をお願いいたします。(拍手)

最後の最後なのですが、法学部長として私から皆様にお礼の意味も込めて、ご挨拶させていただければと思います。今日は非常にお足元の悪い中、リスクマネジメント・シンポジウムにご参加頂き本当にありがとうございました。今日は、来年度から客員教授として本学でご協力いただく事になっている色々な専門の方々にお話しをしていただきました。リスクマネジメントという言葉自体非常に多義的でして、話せば話す程一体それは何なのかと言うことが分からなくなってくるのですが、今日の話の中で、結局計画を立てる、予想する、準備をする、こういう事がリスクマネジメントとして非常に重要だというお話がありました。それと、そうはいつでも健全な社会常識に基づいた判断力でいざという時に判断していく、臨機応変に対応していくというのが重要だというような話の二つに集約されていると思います。森鷗外に色々な小話を集めたエッセイ集がありまして、昔大学受験の時に読んだのですが、『智恵袋』というタイトルだったかと思うのですが、擬古文で書かれたエッセイの中でこういう話を紹介しております。祭の時に人々が沢山集まって来た、その人達が橋の上に雪崩れ込んで来た。かつて神戸でしたか、花火大会の時と同じような事例が江戸時代にもあった。その時にこのままでは橋が落ちると危険を察知したある武士が、橋の欄干に飛び乗って刀を抜いて「この橋にこれ以上渡る事は罷りならん」というふうに言って、刀を抜いて振り回して人々を押しとどめたという話があるのです。これはまさに危機対応で、森鷗外はこれを「臨機応変とはこのことなり」と言っているのです。こういった臨機応変な発想力、常識的な判断に基づいて、しかし機敏に、果断に度胸を持って行動するというような事が危機管理・危機対応だとすると、こういう学生を我々は育てていきたい。様々な事例を通して肝心な時にどういう判断を示すのかというような、そこを問える学生を我々は育てていきたいと思っております。リスクマネジメント・コースは2009年度4月から始まります。またこういった機会を設けさせて頂いて、大学で今どういう事を行っているのか、どういう事を学生に教えているのか、

どういう事を考えているのかという事を皆様方にお伝え出来ればと思います。様々なご協力をこれからも頂くとお思いますけれども、今後ともよろしくお願い致します。今日は本当に長時間有り難うございました。これでシンポジウム終了とさせて頂きたいと思います。ありがとうございました。

(以上)